

説教学 I

R. ボーレン 著
加藤 常昭 訳

日本基督教団出版局



著者近影

PREDIGTLEHRE

RUDOLF BOHREN

Tr. by Tuneaki Kato

Chr. Kaiser Verlag München

Copyright, 1971

The Board of publications

The United Church of Christ in Japan

Tokyo, Japan

日本版への序

日本で説教する方たちのためにわたしが願うのは、この『説教学』が、新しい勇氣と、新しい喜びを、与える助けになれば、ということである。神についての沈黙が日本において破られるならば、それは日本語でなされることと思うのである。

教会的に、また神学的に努力が更に続けられ、ここに明らかになってきているのは、聖靈論的な手がかりから思索することが、いかに実り豊かなものかということである。説教にたずさわっている者は、神学の全体にたずさわっているのである。神学は——まことに多様なものであるにもかかわらず、——世界のいずこにおいても、ただひとつのものである。

この文章を書くに際し、今わたしは、スイスの高い山々の中、わたしの祖先たちの生きてきた谷に座しているのであるが、同時に、感謝の思いをもって、一九六五年の夏のことを思い起こしている。それは、加藤常昭氏が、ドイツにやって来て、わたしのところに来ると告げてくれた時である。——ちょうどその時、わたしはこの本の著述にかかろうとしていた。わたしの親しい友人となった加藤常昭氏は、この『説教学』著述の開始、その本にまことに積極的に参与し、今またその翻訳という難事業を引き受けてくれたのである。わたしにとっては、これもまた恵みのしるし、具体的な兄弟の交わりのしるし、そしてまた、キリスト教会の中にあつては、近くにある地方的なものと、世界的な広がりを持つものとの双方が、それぞれの場所と意味を持ち、しかも互いに互いに影響しあうことができるかの、よきしるしなのである。

この意味で、わたしの願うところは、この書物の中にある、日本の読者にとっては、わかりにくく、不慎れに

思われるものもまた、読者の方たち自身が、自分の場所で、更にその翻訳を試みることで、やがてお役に立つようになること、なのである。

一九七五年夏 グリンデルヴァルトにて

ルードルフ・ボーレン

はしがき

神についての沈黙が破られるということ、そして、神ご自身がその沈黙を破られるということ、それが現代の説教にかかわるすべての問題、および説教のすべての危機の、アルファでありオメガである。説教が神を語りそこなう時、説教はいっさいを語りそこなったのであり、人間に対する自分の本来のあり方を誤ったのである。——ひとつの説教が、現代の苦悩の源であるこのひとつの沈黙を破ろうとするほど、僭越であることはないであろう。しかし、この沈黙の中を突きぬけて、言葉が出来事となるあの限界点に至る道程をしるべきではあろう。この説教論の目的・目標とするところは、そのように、はじめから自分自身の手にあまるのである。

この書物のための仕事をしている間に驚くべき発見をしたことがあるが、そのひとつは、聖書が説かれていないということである！ テキストについて沈黙してしまっていること、福音の使信に与えられるべきアクセントがよそへ移行してしまっていること、不愉快なものは抑圧してしまっていること、更にはまた、聖書をあまりにも急いで開きすぎることで、テキストの文字そのものに無思慮に固執し、テキストをめぐる聞きあきたおしゃべりをする、そのいずれにおいても、神についての沈黙が広く広がっている。聖書について説教がなされないというところがその書を閉ざしてしまった。聖書は沈黙しているのである。沈黙が破られるならば、それは語られ、聞かれるようになる。説教論というのは、聖書に対してこの世を、この世に対して聖書を開示する助けをしななければならないはずなのである。そこで説教論はそのような開示をしてくださる方、すなわち来りつつある聖霊を指示することによって、説教するための、新しい神学的手がかりを求める。この説教論は、神学の専門家以外の人々の言葉にも耳を傾ける。たとえば、おそらく永遠不変のものをつくり出すことはないかもしれないが、文学者と

して、あの神の沈黙がこの世に投げかける影に対して、それなりに対決している人の言葉を聞きとる努力をもうするつもりである。

神が沈黙を破るべきだとすれば、キリスト教界内部の対話が行なわれなければならない。聖霊論を説教の行為との関わりで考察するに際して、エギュメニカルな次元⁽¹⁾が、わたしにとって徐々に重要なものになってきた。しかし、英語圏の研究労作を有効に用いたいという最初の計画は——他のよき諸計画と共に——力量と時間の不足から放棄された。時間の制約のもとで、わたしは、説教教学上のすべての認識を提供することよりも、むしろ、このような過渡的な時代にあつては、伝統的なものも、新しい、現在台頭しつつあるものも、いずれも批判的に弁護すべきだと考えた。その際、こうした弁護が、ある人には、あまりにも伝統に固執しており、ある人にはあまりに進歩的に思われるであろうという危険は、あえて冒すつもりなのである。

わたしはこの書物を、カトリックの人々にも、ルター派や改革派以外の諸教派の教会の説教者たちにも読んでいただきたいと思つて書いた。更に信仰の同志と言うまではいかなくとも、少なくとも、徐々に説教者として用いられるようになってきている信徒の人々のことを特に考えた。また、神学的に立場を異にする人々も読んでくださり、この書物に腹を立てるよりも、むしろ利益を得てくださればと思う。なお、この書物の読み方について一言したい。各章はそれだけで独立に理解することができ、わかりやすいはずである。もちろん、神学的に言つて、この書物は全体でまとまつており、それぞれの発言は、この全体との関連で考察されるべきであることは言うまでもない。——わたしにとって特に問題となつたのは、その時その時に適当な文献を挙げるということであつた。ほとんどの章においても、参照する本の数を制限しなければならなかったためによけいに困難であつた。各章に掲げられた表題は、一部は、そのテキストをどのように用いるかを、明瞭に、あるいは暗黙に示すものであり、またあるものは勉強する人々のために指示を与える役割を果たしている。

ここでお残っていることは、謝辞を述べることである。第一に、スイスのアールガウにあつたホルダーバンク Holderbank (Aargau) の教会で、アルレスハイム Arlesheim の教会に感謝する。そこで説教することゝわたしは喜びであつた。これらの教会の説教体験がこの書物において結実したのだと思つている。——それから、説教論をくり返し問うた説教者、学生たちに感謝する。——わたしのよき、有益な仲間である、ヴァッパターール神学大学の前任、現任の同僚たちに感謝する。その代表として、特にユルゲン・モルトマン⁽²⁾ Jürgen Moltmann とゲオルク・アイヒホルツ Georg Eichholz 両氏の名をここで特に挙げておきたい。——わたしにさまざまな意見を述べてくれた専門家諸氏には特別にお礼を述べたい。——長い準備のうちに、一九六五年から六六年にかけての冬学期に、この書物の下書きを始めた時、日本から来た加藤常昭氏がヴァッパターールに滞在し、毎週批判的意見を述べつつ共同に仕事をしてくれた上に、若い教会の状況に触れさせてくれた。——マンフレート・ヨズツティス Manfred Josuttis 氏には、多くの刺激を与えられた。彼は最初の草稿を通読し、批判的にそのすべてにわたつて、わたしと討論する労を惜しまなかつた。——これをもう一度新しく改稿するに際しては、わたしは、作家のゲアハルト・デーブス Gerhard Debus 氏といつしよに仕事をした。このデーブス氏のようなひとりの人間が、他人の労作をまるで自分の著作であるかのごとく扱うことができ——異なつた神学的諸前提から出発しているものであつたとしても——そのようにして、本書に示したようなやり方で神学的な手がかりを得ていく方法を著者自身にも納得させ得たという体験は、愉快なものである。すべての文章が、やはり、彼との共同作業の中で生まれたのである。——ヘルムート・デニマー Helmut Denner、ウードー・グループ Udo Grub、エーリヒ・ヴァルター・ボルマン Erich-Walter Pollmann の助手諸君はさまざまな引用文を検討し、ボルマン君は更に校正してくれた。カティ・ビュープナー Kati Hübnér は、著述の完成を助け、索引を作ってくれた。最後にもう一度、アルレスハイムの教会、ジャン・ボナール Jean Bonnard 牧師に感謝する。出版に際して

多額の援助を惜しまず、それによって書物の頒価をたいへんやすくすることができた。彼の名を尊敬をもってここにあげ、更に同教会長老会に感謝する。この長老会はわたしを力づけ、耳を傾けて聞き、勧告し、あるいは反論を加え、わたしの説教の教師となってくれたのである。

これらの多くの援助者の助けなくして、この書物は決して成立しなかったであろう。これらの助けは、わたしにしてみれば、学生にとっても説教者にとっても約束に満ちたしるしなのである。

一九七一年聖霊降臨節に

ヴァンタールにて ルードルフ・ボーレン

目次

日本版への序 3
はしがき 5

第一部 序論的行程

第一章 情熱としての説教 15

第二章 困惑

第一節 神との関わりで知る困難 37

第二節 言葉を失った世界において神について語ることに ついて 46

第三節 言葉を失っている教会 53

第四節 自己自身との関わりにおける困難 56

第三章 予備的諸問題

第一節 説教の定義について 65

第二節 説教論の方法について 74

第三節 この説教の課題、構成、構造 74

第二部 説教の根拠

第四章 聖霊

第一節 説教の基礎づけ 86

103 101 99 86 81 74 74 65 56 53 46 37 17 15 5 3

第Ⅱ節	説教学に対する聖霊論の意義	118
第Ⅲ節	言葉を与える者、そして言葉の賜物としての聖霊	133
第五章	名	144
第Ⅰ節	み名による説教の正当化	145
第Ⅱ節	解釈学的問題としての名	153
第Ⅲ節	同一性への奉仕	170
第Ⅳ節	コールブリュゲ論	175
第Ⅴ節	決して悪魔の説教でなく	177
第六章	聖書	181
第Ⅰ節	み名についての原記録としての聖書	183
第Ⅱ節	賜物を与える霊の記録としての聖書	186
第Ⅲ節	全体としての聖書	190
第Ⅳ節	テキストとテキストの選択について	192
第Ⅴ節	旧約聖書の説教	201
第Ⅵ節	講解説教小賛歌	206
第七章	言葉と霊	219
第Ⅰ節	出来事としての統一	219
第Ⅱ節	言葉の拡大としての解釈学	225

第Ⅲ節	説教様式に関して与えられるいくつかの結論	232
第Ⅳ節	時間の諸形式	245
第八章	釈義とコミュニケーション研究の間にある説教	250
第Ⅰ節	予備的考察	250
第Ⅱ節	釈義	256
第Ⅲ節	コミュニケーション研究	261
第三部	言葉の時間形態——想起・約束・現在——	269
A	想起としての説教	271
第九章	神の想起の中における説教の基礎づけ	271
第Ⅰ節	想起についての聖書的・神学的黙想	272
第Ⅱ節	想起——歴史的批評——言語	279
第Ⅲ節	想起の奉仕	283
第Ⅳ節	聖餐と説教による想起	286
第一〇章	物語ることとしての説教	290
第Ⅰ節	説教による物語	291
第Ⅱ節	受難物語	296
第Ⅲ節	日々のこととして物語ること	302
第Ⅳ節	説話の手法による物語	306

第V節 教えとしての物語	308
第VI節 現実存在の解釈	311
第VII節 危険	317
第一章 説教と引用	319
第I節 予備的考察	320
第II節 引用の方法	329
第III節 付論・他人の説教を用いることについて	343
第IV節 コラージュ	353
第V節 聖書による証明とモンタージュ	356
第二章 罪の想起	362
第I節 人間的に罪について語ること	365
第II節 父祖の罪についての信徒の説教	369
第III節 ひとりの作法になつたドイツ人の物語による説教	374
B 約束としての説教	386
第三章 約束の現実性	386
第四章 来りつつある救済者についての説教	401
第I節 断片的な言葉	401
第II節 完成のための神と人間の協同作業について	404

第III節 再臨接近待望の問題	408
第IV節 喜びのかたち	418
第V節 ユーモアについての付論	423
第五章 来りつつある審判者についての説教	439
第I節 問題状況	440
第II節 審きの説教の地獄の説教への倒錯	446
第III節 十字架についてのわれわれの説教に対する問いとしての、 来りつつある審判者についての説教	450
第IV節 審きの説教にとつての自然主義神学による脅威	455
第V節 恐れのかたち	460
第十六章 黙示文学の説教	467
第I節 黙示文学の言葉とわれわれの言葉	468
第II節 黙示文学的な信徒の説教	473
第III節 説教者にとってファンタジーの必要について	477
C 現臨者の説教	492
第十七章 現臨の多様性	492
第I節 前提・霊の現臨	492
第II節 王座にまで挙げられた方の説教と昇天についての説教	496

第Ⅲ節 貧しき者におけるキリストの現臨についての説教	505
第Ⅳ節 教会として現実に存在するキリストについての説教と聖霊降臨についての説教	511
第Ⅴ節 世界の創造者の現臨についての説教	522
第一八章 つなぐことと解くこと	535
第Ⅰ節 説教の標準語	535
第Ⅱ節 新しい救いの状況	543
第Ⅲ節 留 保	551
第Ⅳ節 悪魔ばらい	557
第十九章 説教としるし	563
第Ⅰ節 しるしと奇跡	564
第Ⅱ節 奇跡の解明としての説教	570
第Ⅲ節 現実に働くキリストの説教	583
第二〇章 説教と異言	591
第Ⅰ節 異言弁護論	592
第Ⅱ節 現代の言語追求のコンテキストにおける異言	603
第Ⅲ節 異言と現代詩の間の説教	607
訳 注	614
訳者あとがき	632

第一部 序論的行程

今日の講壇に支配的な倦怠の事実に向面しつつ、著者は、情熱をこめて、説教するということのために弁論する。説教の言葉——神の言葉、人間の言葉、そして人間のための言葉がひとつになっているもの——は、何よりもまず第一に、ある特定の人間の語る言葉として聞かれる。説教の教師そのものが、自分は情熱的な説教者であると考えているということから、この説教論は始まるからである。

第一章 情熱としての説教

わたしが情熱をこめて、好んですることが四つある。絵をかくこと、スキー、木を切り倒すこと、そして説教である。⁽³⁾情熱というものは、すばらしいもの、しあわせを与えるものだと思われる。情熱は祝福を開示する。白い画布、絵筆と絵具、何よりもさまざまな色彩、そこにひとつの新しい世界が生じる。そしてわれわれは夢中になるのである。——けわしい壁、粉雪が舞う。スキーに支えられ、重力を失ったかのように、空間と時間の支配者となって、走りに走る。地上から全く自由になりつつ、しかも地上にあり、雪の中に飛びこんでいく。——傲然と立つ木、さからいつつ立つ木、これに攻撃を加えるには戦法を練らなければならない。知略も必要であるが、何よりもねばり強さがなくてはならない。こいつははむかってくるからである。その傲慢がみじんこに砕かれるまでは、自分はこの木に勝てないのではないかと思う瞬間もあるのである。——絵をかくこと、スキー、木を切り倒すこと、それはわたしの心を燃やす——そして説教するということもそうなのである。説教することが開示する祝福をわたしは描き尽くすことができない。

今述べた三つの働きはすべて、説教することのたとえとして通用する。特別な方法で描くこと、走ること——新約聖書はひとつの「道」について語る——樹木ではないが、神の認識にさからうあらゆる建築物を破壊すること、そこではいずれにせよ、新しい世界が、自由が、戦いと勝利が大切なのである。それゆえに、説教することはすばらしいのである。もとより説教は水彩画と同じく失敗することもあるし、スキーをしている時と同じように倒れることもあるし、都会育ちの男が木を切る時のように疲れ果てて、絶望的になることもある。だがしかし、説教することはすばらしい。それは喜びをつくる。これが説教について学ぶべき第一のことである。第一章における第一のことはこうである。説教とは、喜びをめざす教である。説教への手びきは、喜びへの手びきである。説教するということは、喜びへと至るべきなのである！この喜びの中で、神についての言葉は、その目標に達する。喜びは、神についての、あの最も優しい証明を作りあげる。この証明は、諸思想を力づくで倒さず、むしろ救いあげてしまうので、神学者たちには不愛想に軽蔑されてしまうものである（他の箇所、特に第二章第Ⅱ節第一項を参照のこと）。

わたしの趣味とするところを最初にあげ、説教することと同列にすることをしたのは、思慮あつてのことである。結局は、説教は、木を切ることは違つて、休みの日の仕事、日曜日の仕事なのである。それは喜びを作るべきなのである！使徒パウロは福音の伝道者を「喜びのために共に働いている者」〔第二コリント一・二四〕と呼んでいる。説教を準備するとは、喜びの備えをすることであり、そこでは、気むずかしかったり、中途半端であつたりすることはあり得ず、ただ全く喜んで、つまり情熱的に事にいそむのである。そしてそのことによつて、すでにわれわれ自身が、来りつつある喜びの中に引きこまれてしまうのである。

われわれのさまざまな労働が疎外のもとにあるのではなく、アダムの呪いのもとになつたとしたら、おそらくいつさいの労働が休みの日の仕事となり、喜びの地平の中に置かれることになる。喜びに仕えるものである

はずなのである。そうとすれば、説教の作業は、いつさいの人間の労働の具体的典型であるとも言えよう。説教作業の中にひそんでいる可能性は、その本質を明らかにする。説教をめぐる努力をする者は、労働の前衛（アヴァンギャルド）に属する。説教者というのは、原則的に言つて、先立って働く者 *Vor-Arbeiter* なのである。説教者がなすべきことというのは、いつさいの作業が、意味深い、固有の仕方、それに向かうべく定められているようなこと、つまり、喜びをこの地上にもたらしするための助けとなるということである。このような観点においては、説教することは、遊びの性格を持つてゐる。このことによつて、すべての説教に共通の唯一の基本的性格を語るわけではないが、この特質を無視することはできないのである。何よりも神の言葉を賛美し、歌いあげてゐる詩篇第一一九篇が、その原文においては文字による遊びを表わしているということは、ほとんど偶然とは言えないのである。詩篇作者にとつては、この遊びの形をとることが、神の言葉について語る正しい方法であつたことは明らかである（ここでは遊びたわむれるのであつて、賭けて遊んだわけではない！）。

各福音書における最も特徴のある語り口が、やはり遊びの形態のものであるということも偶然ではないし、われわれの説教にとつて無意味ではないであらう。即ち「遊びとしてのたとえ（*Das Gleichnis als Spiel*）」（ゲオルク・アイヒホルツ）である。そうすると、説教するということは、言葉による聖なる遊戯である。宗教劇といふのではない。むしろ子供の遊びである。話すことを学ぶ「幼な子」の遊びである！わたしが思うに、多くの説教者がこの事情を忘れ、そのために自分のやつてゐることを喜ぶことができなくなつてゐるのである。自分がホモ・ルーデンス（遊びの人）であることを説教者が忘れてしまうと、容易に、預言者の衣で着飾つた、講壇上の悲劇役者になるか、あるいは、もっと悪いことに、しかも残念ながらこちらの方が広く見られる現象であるが、退屈な人間になってしまうのである。

遊びの概念については次のものを参照していただきたい。

ロバート・ロイエンベルガー「真理と遊び」福音主義の礼拝の将来を問う」雑誌『神学と教会』六七号所収、一九七〇年、二五〇ページ以上。Robert Leuenberger, Wahrheit und Spiel. Zur Frage der Zukunft des evangelischen Gottesdienstes, ZThK 67, 1970, 250 ff. ヌズハネ・M・ヴァン・デル・ヘーグ「われら聖なる地上に何を欲す……」『幸福の権威』一九七〇年。Gerhard M. Martin, Wir wollen hier auf Erden schon……『Das Recht auf Glück』1970. ムルゲン・ホルツマン『創造の最初の解放者たち』自由における喜びの遊びにおける快感の試論』一九七一年。Jürgen Moltmann, Die ersten Freigelassenen der Schöpfung. Versuche über die Freude an der Freiheit und das Wohlfallen am Spiel, 1971.

わたしの言うことを誤解しないでいただきたい。遊びというのはふまじめなこと、だらしないことを意味するものではない。そのような人間は、遊んだとしても、説教を悪くもてあそんでしまったのである。そういう人は、偽りの遊びをしていることになる。遊びとは、ここでは、中途半端ではなくて、情熱的な喜びをもって、それに参与しているということであって、事柄の真剣さを疑うことではない。ただ、われわれが人間であって、神ではないことを承知しているのである。説教者がホモ・ルーデンスであるということの意味は、おそらくこういうことになる。説教者は、説教がなすべきことを自分で「作り出す」ことはできない。理性の啓蒙を知り、自己の成熟を常に賞賛し続けているようなこの時代にあって、全くの最初から、ほかならぬこの特質をこそ強調することは必要である。それは幼な子のごとき語り方をするように励ますためではない。逆である。聖なる遊戯としての説教は、知恵をもって説教することとも言えよう。この知恵は——箴言第八章三〇節によれば日々に恍惚たる喜びであり、神の前に常に遊び楽しんだのである。もとより、この知恵のたわむれが、この世の賢者たちには不可解なままであることもありうるではあろう。

ある人が、自分は情熱をこめて喜んで説教しているのだと言えば、せいぜいのところ、それはこの人のしあわせな氣質を示すのだと見なされるか、悪くすると、自分のしていることに夢中になっている熱狂主義者だということにされてしまうであろう——このいずれの非難もそれなりに正当である。しかし、わたしが自分を例にして説明しようと試みたことは、たとえこの「わたしという」実例そのものが疑問視されるにしても、正当な発言として承認していただきたいのである。詩篇第一〇七篇二二節によれば、救われた者たちは喜びのうたをもつてみわざを語り伝えるべきなのである。そして、説教は神について語るのだとすれば、それはやはり、詩篇の詩人が「あなたのほかにさいわいはない」(一六・二)と言いつた神について語るのである。詩篇第一一九篇は、いましめがどれほどに楽しみなものを語って疲れることがない。「あなたのいましめはとこしえにわが嗣業です。それはわたしの心の喜びだからです」(一一一節)。

エレミヤは、試練の中でみ言葉の喜びを思い起こす。「わたしはみ言葉を与えられて、それを食べました。み言葉は、わたしに喜びとなりました。万軍の神、主よ、わたしがあなたのみ名をになうことは、わたしの心の喜びとなったのです」(エレミヤ書一五・一六)。明らかにエレミヤにとっては、み言葉をうけるということは、喜びを受けることなのである！説教することにおける喜び、「情熱をこめて喜んで」ということは、説教者の人格の中に求められうるようなものではない。喜びの言葉そのものであるみ言葉それ自身の中に求めうるものなのである。それゆえにヨハネの伝えるキリストも「自分の語るごとの目標として喜びを挙げられるのである」。「わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちに宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」(ヨハネ一五・一二)。説教者が聖書に耳を傾けながら、キリストご自身を聞きとるとすれば、その時、彼は満ちあふれる喜びにはいるのである。喜びなき説教者は、おそらくまだ少しも聞いていなかったのである。喜びとは、聞くことに成功することである。このことは、われわれが喜びに仕えるものだという理

由によるだけではない。むしろわれわれの仕事そのものが喜びの仕事であり、われわれが扱う言葉が喜びをもたらすものだからである。み言葉への奉仕が喜びをもたらす。いかなる趣味の与える喜びも色あせる喜びをもたらすのである。

説教における喜びに不可欠なのは冒険である。説教は、あえて試みられる企てである。その向こう見ずのところ、説教に慣れて、毒にも薬にもならないものにしてしまうというところで覆われてしまふべきではないであろう。われわれが説教するということを、聖なる遊びだと定義する時、今それに付け加えられなければならないことは、この遊びにわれわれは生命を賭けるのだということである。自分の説教を、役人が書類を片づけるように事務的にやってのける時でさえもそうなのである。常に生死が問われているのである。

アンリ・マチスが、自分の描くどの絵にも、自分は生命を賭した冒険をしてきたと言ったことがある。芸術家が誇張したことを考慮したとしても、ここにひとりの人が、絵をかくことのために、いっさいを身に引き受け、いっさいを賭してきているのを否定することはできないであろう。説教者は更になおそれだけのものを投入しなければならぬことか。ここでは、線とか、平面とか、色彩どころではない、焼きつくす炎である神が問題となっている。この神の到来と現臨をわれわれは告げなければならない。そうとすれば、火災が起らないで済まないのである。われわれは火消しではなく、火つけ役であるべきである。花火職人ではなく、炎を投ずるためにやって来た放火者なのである。——われわれのつとめは危険である。なぜならば、ここで、この投げられた火に耐えられる誰があるかと思ふからである。——この冒険はもうひとつ別の局面を持っている。どのような説教においても、われわれは一種の急坂滑降に取りかかるのである。その急坂のかなり上方で、まだ完全に見通しがないところで、突然深淵が口を開く。しかもこの急坂は、やわらかな土地ではなく、岩石の間を走っているものである。説教する者は、その目的地は知っているものの、その途中では未知なるものの中に突っ込んでいくのである。

くのである。

説教者の冒険に更に不可欠なものは、この場合にはいつでも冒険を行なう者の条件が、満たされていないのだということである。滑降競技をする者は傾斜を知りつくし、どのように重心を傾けるべきかを知っている。なお最後の不確定要素を残すとしても、自分の事柄について確信を持ちうる。おそらく勝利は確信できぬまでも、立派に滑ることができると確信しうる。説教者は勝利を確信しているかもしれない。しかし自分に立っている力があるかどうかは自信がないのである。絵をかくこと、スキー、木を切ることに限っては、わたしは、自分が何をなしているか、何をなし得ないかを知っている。自分が何を信頼することをゆるされているか、ゆるされていないかを知っている。説教する際にも、わたしは自分の限界をわきまえなければならぬ。ただし、それはほとんど役に立たない。なぜならば、はじめから限界を越えてしまっているからである。自分の限界の内部にあっては、わたしはただ神々について、神の思想について語りうるだけである。それらは、現実には、神を欠いているのである。説教する者は、いっきよにその限界を越える。自分に不可能なことをする。ゆるされない冒険をする。火を投げる。つまり、「神」を語るのである。しかし、その場合には、自分に不可能なことをあえてするということが意味することは、その不可能ということの中で冒険を行なうことであり、その冒険をあえておこなうことの中で、「可能」を知ることなのである。そうでなければ、説教論の教科書は無意味であり、説教学は異言についての講習をもって代えるべきことになる。しかしそれもまたおそらく不可能であろう。したがって説教論は、勇気を起こす書物、そこから喜びが生じてくるような正しい冒険への手びきでなければならないということになる。この冒険はしかし、盲目の冒険であるべきではない。あらかじめ、知識を得ておくことが必要なのである！この冒険が成功すべきであり、挫折に至るべきでないならば、この知識を得ることが必要である。これまで、情熱をこめて喜んで説教するというについて語ってきた。この「情熱をこめて喜んで」という言い方は、ひ

とつての逆説を示している。「情熱をいふ Leidenchaftlich」「情熱 Leidenschaft」やいふやうな「苦しいこと」Leiden に関わりがあるからである。今までわれわれは、一方の面だけを見てきた。ここでもうひとつの面を見ることが適當であろう。

ニアハルト・ケストナー Erhart Kästner はこう述べている。「……情熱とは、友情、敵意、幼さと同じく、ひとつの状態である。苦しみの中の状況にある、それはひとつの宿命である。熱情 Passion と同じく、それはわれわれがあらゆる苦しみの道を意味する。つまり情熱の中にあるとは、苦しむことである。情熱の中に、わたしはちょうど捕われの身になるごとく踏み込んでいく。それは苦しむことができるということである。この言葉は受動的である。しかしわれわれは行動至上のところがあるので、これをきわめて能動的なものにしてしまった。だがそれは、間違いいじみたものへの転化ではないのである」『ひばりの学校』Die Lerchenschule, 一九六四年、一八八ページ。

明らかにわたしも、間違いいじみたものへの転化に踏みこんだのであろうが、「休みの日の労働」について語った時、それによって自分を修正するつもりではあったのである。今や「遊び」とか「冒険」とかという用語は、「苦しむ」、「情熱」という用語によって補われなければならない。これらのことは、「情熱をこめて喜ぶ」ということに不可欠のことであり、常にこれに伴い、あるいはその前後を走るのである。情熱をこめて喜んで説教する者は、情熱が単なる気質の事柄でない限り、苦しむことを覚悟するのである。情熱がほんものであるか否かは、この常に同伴してくれるものを耐え忍ぶことによって証明されるであらう。

ここで支払わねばならない苦痛をあらかじめ見積るといふ試みは、このあらかじめ知識を得ておくという作業に不可欠のものである。それは厳密にまえてもって計算することが可能だというのではない。そうでなければ、この冒険は計算可能となり、冒険ではなくってしまふであらう。しかし状況によって驚かされ、その中で硬直し

てしまわないためには、あらかじめ見積りをするのもまた必要なのである。ここでは生死をかけた遊びが問題になっているのだというわれわれの言い方も、苦しみについて語られぬ間は、空語でしかないことになる。

説教論というものは、われわれが言葉のとりこになりつつ、どのような態度をとるべきであるか、「苦しむことができる」ということは何を意味するのか、ということへの手びきをすべきである。なぜなら、そのようにしてこそ、説教論の語るべき第一点について十分なことがなされるのである。説教論は喜びへと手びきする。それはただ苦しむことがしりぞけられないようになされる。「神が正しく高き賛美を受けるのは、世俗のことに病んでいる精神によるほかはないのである」(カタリーナ・レギーナ・フォン・グライフェンベルク Catharina Regina von Greiffenberg)。

わたしは、自分がなした予備的考察の最初の諸命題を越えて更に前進するまえに、わたしがすでに始めてしまった告白について、なおひとつの意見を述べておきたい。わたしがどれほど情熱的に絵をかき、スキーを走らせ、木を切るうと、これらすべてのことを、わたしは捨てることもできる。切つてもよいほどに伸びた木がなければ、切る必要はない。雪が降らなければ散歩に行けばよい。絵をかくことは次の夏休みまで待ってもよい。正直に言つてこれらのことについて語るのには、いささかこれみよがしのことになりかねない。しかしいささか悲壯な言い方かもしれないが、自分の趣味は捨て得ても、説教することをやめることはわたしにはできないことだと言いたい。用心深く言えばただこう言いたいのである。わたしは今ではや説教者としての任命を受けて働いているわけではないが、説教することをこれまでやめたことはなかったのである。しかしながら、最初の説教者たちのひとり、「もし福音を宣べ伝ええないなら、わたしはわざわいである」とわれわれに語る時(第一コリント九・一六)、彼はそのことを説教者たるわれわれに、すべての説教者にあてはまることとして予言したのである。そこで、わたしはここに予告されたことをもう一度自分の言葉で言い表わしてみながら、説教論を書かなければなら

ないのである。こういう誇張がゆるされるとすれば、わたしのこの次にする説教の準備のためにひとつの説教論を書くのである。もう少し誇張をやわらげて言えは、わたしは説教することとを学びたいし、学ばなければならぬ。それゆえひとつの説教論を書きたいのである。説教を強いられることから、説教論の必然性が生じるのである。

「情熱をこめて喜んで」ということ、説教について喜び、また苦しむということに不可欠なものは、ここでは常に生徒であり、初心者であり続けるという意識である。学びつくしたなどというものは愚か者でしかない。そして常に初心に帰り続けることのない者は、ただ虚栄に生きる者でしかない。み言葉は常に新しく聞かれ、新しく語られなければならない。あらゆる説教の状況が、そのたびに新しくわたしをして、生死を問う冒険にのぞましめるのである。それ故に、説教するということは、説教のたびに新しく始めるという恩恵を与えてくれるのである。このような恩恵を把握するということが、生徒であり続けること、これに思いをいたすこと、それが説教論を構想するということであり、研究することなのである！

さてしかしわたしはこの書物を、ただ単に説教者としてばかりでなく、説教の聞き手としても書いていく。ここでどうしても更に告白しないわけにはいかない。自分は情熱をこめて喜んで説教することとを語りうるとしても、わたしは——これでも十分遠慮深く言っているのであるが——ひと息に、わたしは情熱をこめて喜んで説教を聞くとは言いくいのである。ここでわたしの心を妨げる二重の悩みがあるからである。

第一に、われわれが聞くよりもむしろ語りたがるということは、人間の虚栄心と愚かさにと当然つきまとうことである。そうでなければヤコブの手紙の知恵の言葉は不必要なことになる。「人はすべて、聞くに早く、語るにおそく、怒るにおそくあるべきである」(ヤコブ一・一九)。この言葉を、神のみ言葉を聞き、また教えることとの関連で解釈しようとした注解者たちがあった。彼らはその語義の把握において誤っていたとしても、その誤りが示しているのは、彼らが、明らかに説教者の危険を深く見ぬいていたということだと言えよう。——だが

この知恵の言葉が、一般的な知恵を言い表わしているとしても、説教者というのは、誰にもあてはまる勧告を自分の説教については無用とするほどに超人ではないのである！人間は、早く聞くことと遅く語ることにについて警告を必要としている。——説教者としてもそのようなのである。

虚栄と愚かさ生きる者は、聞くよりもむしろ語ろうとする。このような事情は、神のごとくありたいという原罪を明らかに示しているということもあり得よう。神が言葉であられたがゆえに、わたしは自分が言葉でありたいと願う。ちょうど牧師も礼拝において最初の、また最後の発言権を持っているように、最初の、また最後の言葉を語りたいと思う。神のごとくありたいと思う。人間であるうとし、聞くこととするよりも、言葉そのものであるうとするのである！ここにわれわれが受けることにとどまるよりも、むしろ自分から働きかけ続けているということの究極的理由があるのである。

われわれは更に、聞くことの、説教を聞くことの困難さを軽視してもいる。まるで説教を聞くことの方が説教することよりも容易で、危険も少ないかのごとくである！聞くことは冒険ではなく、焼きつくす炎である神と関われるのは語り手だけのようである。聞くことも直滑降であり、聞き手もまたその傾斜を知らず、隠された深淵に気づかないのである。ここでもわれわれは、転び、ひっくり返り、脊椎をいためることがありうる。聞くことが、説教することと同じように冒険であるならば、聞くというその冒険も、これこそ、「情熱をこめて喜んでする」ということにならなければならぬし、われわれが説教を聞き得た時には、それはすばらしい、祝福を開示するものでなければならぬのである。説教への道程は、快活さへの道、喜びへ至る道でなければならぬ。そして、説教が行なわれる道程も、喜びへ、快活さへ、開示された祝福への道程である。

しかし——これが沈黙しておくわけにはいかないもうひとつの悩みであるが——わたしが説教において聞きとるものは、概して喜ばしさをもたらさない。説教におけるほど言葉が多くて、しかも自分には無関係に語りすこ

されてしまうことはまれである。憂愁の気分や、キリスト教と結びつけられた、あらゆる種類の時代分析、この世の知恵（ああそれが本当に知恵でさえあってくれたらと思う！）、わたしはまことにしばしば、説教壇から霧のようなものが立ちのぼるのを見る。それは、むしろ霧が晴れることこそ必要な時に、日光をさえぎり、会衆の上に広がるのである。そのような言葉の流れにあつては、わたしは眠ることもできないままであり、むしろ、退屈な話の時には目を開いたまま眠るという噂のある、かの才能豊かな教会指導者を羨しくさえ思うのである。

もちろんわたしは、この説教学的に言えば霧に閉された国にも、光のあたっている場所のあることを知っている。太陽の島があるのである。ひとりの解釈者がテキストを説き明かしてくれる。そしてそのテキストが、われわれにとつても今日いきいきとしたものになってくる。テキストそのものが語るものである。一度は、ひとりの村の牧師であつた。もう一度は世界的に有名な組織神学者であつた。彼は聖書の教えを展開した。そしてわれわれは天国にひき入れられたのである。それゆえにルターも、たとえばステパノの見た幻を、説教の出来事と関連させることができたのである（ヴァイマル版全集第四六巻、七二二ページ）！ 教会が教えるという日常的な出来事において、天が開かれる。「神はここにおられる！」そこに天国が開かれる！そこに、あの愛そのものである火が燃えるのである！ 気の利かぬ聴衆の一人が礼拝の終わった時に、「うるわしい」説教を聞いたと語ったとしても、それを、説教者がうるわしく聞こえるように話して聞かせただけであること、その聞き手に正しい判断が欠けていることとしるしであると思ふ必要はない。そのことが、ここに天国への門が開かれたことを指示することがありうる。新しい歌がうたわれるべく、またそのことのゆえに神学固有の美しさ *pulchritudo* が生まれてくるはずのもの、その輝きのいくぶんかでもさし込んだことを示すしであることがありうるのである。そういう場合、どうして、「うるわしい説教 *schöne Predigt*」に、つまり、聴衆を賛美にひきこむような説教にならないであろうか。教えの中で天国が開示される時、賛美以外の何があり得ようか。どうして喜んで聞

くということがあつてはならないのか！ マルコが、宮において教えられるイエスについて「大ぜいの群衆は、喜んでイエスに耳を傾けていた」（マルコ二・三七）と語ったことの、いささかの痕跡でもくり返されることはあり得ないのであるか。その時、受難もまた遠くはなかつたのである。説教者の苦しみ、「説教」という彼の受難は最初は隠されたままのものである。説教の真実の美しさは、断食をして、その顔に油をぬっている者「マタイ六・一六—一八」の顔に似ている。苦しみの中から説教は輝きを得る。「内側からの大いなる輝き」（「リルケ」を得るのである。雄弁の放つ輝きに反論するものではない。ただ、説教がいつわりの輝きを見せているのではないとすれば、その説教の美しさは、雄弁のそれとは異質のものなのである。

能弁の説教者を聞く時、わたしはよく、まことに大きな悲哀に捕らえられた。——その一方、わたしは、アルバート・シエーデルン *Albert Schadelin* の指導した説教演習における、ひとりの教師試験準備中の学生の説教を決して忘れないであろう。その男はつかえつかえ語った。中途半端であつた。形式的には全く不十分であつた。しかしそこには光があつた。光があつたのである。人々は、この男がテキストを完全には理解していないことがわかつた。そして、彼は、自分は説教をすることができないという思いが、テキストをして語らしめることになつたのである。このような説教者は確かに聞きやすいものではないが、わたしはこのような説教者をこそ喜んで聞くであらう。それにもかかわらず、聞く者の願いを語るものとして、このわたしの説教論を彼の机上に贈りたいのであるが、この説教論は、聞く意志ある者に、聞くことを容易にしてあげることによって、このような説教者の助けともなることであらう。

否定的な、そしてまさしく積極的な聞き手としての体験から、説教への期待をこめて、わたしはこの書物を書きたいのである。

わたしは説教を期待して待つ。説教を必要とするからである。あまりにもおとなになりすぎたために、そして

愚かであるがために、あの遊び、神のお氣に召す遊び、知恵と幼な子らの遊びの中に引き入れられる必要があるのである。わたしは、ふるさとへ帰る歌を歌いはじめ、失われた人々と共に喜ぶことを始める説教を待っている。わたしに生きることを教えてくれる説教を待っているのである。

マルティン・フィッシャー Martin Fischer はこういう記事を書いている。「講義であったか、礼拝のときであったか、ユリウス・シュニーヴィント Julius Schniewind が、嘆き、立腹し、呪うほどにしながらこう物語ったのは、もともと印象深い経験のひとつであった。彼は、ハレにおいて、自分に、神無き者、失われた者の義認を説いてくれる説教者を探し歩いて、ついにそれを見出さなかった。自分にそのことを説きうる者は誰ひとりないのか、シュニーヴィントは、自分の心を脅かすものが何かを、牧師たちは全く理解しないような印象を受けた。牧師たちは、自分自身や、シュニーヴィントのような人の祝福について不安な思いになることなど全くないように思われたのである」『諸考案 Überlegungen』一九六三年、二二ページ以下。

われわれの説教がたくさんの霧や雲を作るばかりで、明るさや光を広げることのほとんどないのは、多くの説教者が、シュニーヴィントの不安を故意に見すごしていることに関連があるかも知れない。おそらく彼らは、われわれが、そうした不安を克服した時代に生きてるように思っているからである。これに対して、やはり問わなければならないのは、教会や世界の中に憂鬱な思いが忍びこんでいるのは、われわれがシュニーヴィントの不安を抑圧してしまっているところからくるのではないかということである。確かにわれわれは今日他の不安も知っている。しかし、それはいかなるものなのか！ それらはすべて、神から遠ざかっており、しかもその神からのへだたりを持ちこたえられなくなっている者の根本的不安に根ざしているのではないか。しばらく、このような推測に踏みとどまることにしよう。もう少し厳密に言えばこう言える。わたしがこの書物を書くのは、罪のゆ

るしについて講義してみても、何らかの決断を求めて叫んでみても、それはわたしの助けにはならず、わたしを助けるのは、ただ判決そのものだからである。つまり判決がその名によって述べられる時、その方が、そこに現におられるような判決がわたしを助けるのである。わたしは、それ自体が奇跡であるような説教を期待する。説教が奇跡であるのは、そこで語られている方が自身が、語られているそのことの中にはいつてこられ、ご自身で発言され、ただ単に神とその解放の言葉について語られるのみならず、そのみ言葉がここに出来事となり、解放の言葉が実際に解放をもたらすようになるからである。

おそらく更にこういうこともゆるされよう。わたしは、そこで語り手自身が自分をそこに賭けることによって奇跡となるような説教を期待している。宗教上のお役人が、日曜日に講話をしてくれるようなことでは、眠らせないまでも、あくびをさそうであろう。わたしが期待するのは、そこである人が、ひとのいのちを救うために自分のいのちを賭けるような説教なのである。たいていの説教者は、あまりにも深く勇気を失っているので言葉に富んでいるのである。そして彼らが勇気を失っているのは、聞いたことがないままに語っているからである。それゆえにわたしは、説教者にとっても、聴衆にとっても、奇跡であるし、奇跡となるような説教を待ち続ける(第三章第Ⅱ節及び第一章参照)。その時、講壇に立つ人においても、その聴衆においても、ネリー・ザックスが、イスラエルについて歌ったことが成就する。「イスラエルよ、あこがれの頂点に立つ者よ、あなたの頭上には、奇跡が雷雨の如く注ぐ。あなたの時代の苦悩の山なみの中に降りそそぐ雨である」。——まさしくそのようなことが起こるために、わたしもまたこの書物を書くようにしているのではないか。

そのとおりである。まさしくそのことを、これまで語ってきたのである。そしてそうなるべきなのである。説教者はすでに先立って語られたことに仕えるべきである。奇跡に赴くべきである。雷雨のごとく奇跡は降り注ぐべきである。そしてわたしの書物は、学生たちへの呼びかけ以上のものであらうとはしていない。斜面上にあら

って、走り出そうとして不安になっている学生、道なかばにあって、何らかの意味で疲れ果て、道を失ってしまったような人に対する呼びかけである。奇跡に向かう途上での呼びかけである。これは必要なのである。なぜならば、奇跡は、自明なるものの反対だからである。奇跡は世界を変革する。創造の世界を変える。個人を変革し、社会を変革する。奇跡において変革が起こる。奇跡は、現在あるものの革命をもたらす。奇跡は、ものをひっくりかえしてしまう。奇跡においては何かが起こる。しかし、この奇跡を奇跡たらしめる出来事は神のなさることであり、計算不能であり、驚異の思いを呼びます。これを計画することはできないのである。

説教の計画をつくることはできる。しかし、約束された奇跡までも計画することはできない。それゆえに、情熱、喜び、冒険、遊び、苦しみについてわれわれが述べてきたすべてのことは奇跡に属するであろうし、これを呼び起こすことはできないのである。それゆえにわれわれは数多く説教しながら、ほとんど奇跡を知らないのである。説教ならざる説教の数を重ね、その上に何らの奇跡も重ねられることのないままに、多くの人々が、説教をしているのである。

そうすると、ひとつの説教論が奇跡行為の手びきにならなければならないのか。それがわれわれの考察の論理的帰結のように思われる。説教は奇跡である時に説教なのである。説教論は、説教が、奇跡そのものにほかならぬ説教になるようにと手びきをするのである。それゆえに奇跡行為への手びきなのである！——こうした論議において、いつも考慮されないままになっていることは、われわれは説教しながら、自分には不可能なことをやっているのだということである。せいぜいのところ説教論は奇跡への勇気を作り出し、奇跡を期待する手びきを与えるだけである。「どうか、あなたが天を裂いて下られるように」(イザヤ書六四・一)。このことがすでに示唆していることは、説教論は、み言葉に仕える者を雄弁の王者にする魔法の書物ではないということである！

「奇跡」という用語にここで追隨して現われるのは「待つ」という用語である。奇跡にとって待つということ

は不可欠であり、奇跡は期待されることを欲するのであるとすれば、ここでは待つこと自体がすでにいささかも奇跡に属することになる。説教が始まるまえに、多くの家々から、待つ人々がひとつの家にやってくる。説教者がその説教を準備し、学生が勉学を始めるに先立って、語りかけを待つ群れがある。わたしがこれまでしばしばいぶかしがったことは、按手礼や牧師就任式に際して、合唱、音楽、花、挨拶など、どれほどの無駄なことがなされてきたであろうかということである。それは栄光あふれる仕事始めの方法ではある。だがそれはしばしばそのうち起こることにいささか適合しないのである。しかし、いずれにせよ、それも、み言葉に対する教会の期待、あがいの心のしるしではあり得よう。説教とは期待された行為なのである。そして説教のつとめに備える者は、自分が期待されているということを、切に待たれているということを、承知すべきなのである。

説教者の所産は期待されているのであり、その一方、詩人の所産は待たれてはいなかったところで市場に投げだされるものであるという点で、説教者は詩人と区別することができよう。この点については、クルト・マルティの次の文章を参照のこと。「説教はどのように作られるのか、詩はどのように作られるのか」「トウルナイゼン記念論文集『言葉と教会』一九六八年、一八三ページ以下。現在では、ドロテー・ゼン他編集の『文学と神学年報三』一九六九年、九四ページ以下にも収められている。Kurt Marti, Wie entsteht eine Predigt? Wie entsteht ein Gedicht?, in: Wort und Gemeinde, Festschrift Eduard Thurneysen, 1968, 183ff. Jetzt auch in: Almanach 3 für Literatur und Theologie, Hg. v. Dorothee Sölle u. a. 1969, 94ff.

もとより、動かされることなく、頑固で、疲れ切った教会もある。しかし、そういう教会は待つてはいないのだとあまりに早急に思いこむべきではない！ さまざまな神学的傾向を持った若者たちが、この点では意見を一致させているのである。

パウル・アルトハウス Paul Althaus は「教会の説教についての疲れというものが、それ自身として存在すること」を否定する。「教会はむしろ新しい舌により、新しい霊の力による説教を待っているのである。われわれの説教には疲れれたかもしれない。しかし、説教そのものにはではないのである」(『福音主義的礼拝の本質』Das Wesen des evangelischen Gottesdienstes, 一九二六年「一八ページ」)。オットー・ヘンダー Otto Hendler は「この発言は今日もなおあっていると言っている」(『説教』Die Predigt, 一九六〇年「第三版」六ページ)。マンフレート・メンツガー Manfred Meißner は「説教の聴衆が、説教に何ものかを期待していること、まことに多くのこと、本来的にはすべてを期待していること」に驚いている(『説教の権能と神の歴史的真理』『福音主義的神学』第二十二号「Die Geschichtliche Wahrheit als Vollmacht der Predigt, EvTh 22, 一九六二年「四七八ページ」)。——この関連で、相互には少しも似てゐない三つの現象に言及しておきたい。最近の学生紛争において、礼拝もまた明瞭な抗議を呼び起すきっかけとなったが、この行動もまたひとつの期待の表現を示すと言えないであらうか。——礼拝に出席する者の数が減少していることから説教の終末を予言する預言者たちに対しては、ビリー・グラムの教会的な意味での成功を挙げることができよう。これも潜在的な聴衆の期待がなければ、不可能なことであらう。——カトリック神学の聖書的説教への転向は、聴衆の期待という表現で総括することはできないかもしれない。しかし、カトリック神学の説教へ向かう驚くべき突如とした展開は、聴衆なしには不可能であらう！カトリックのキリスト者たちが説教に期待していることを表わすものとしては次のものを参照のこと。『聴衆と説教、ひとつの会議報告』オットー・ヴェーナー、シビヤエル・フリッケル共編、一九六〇年。Hörer und Predigt, Ein Tagungsbericht, Hg. Otto Wöhrer u. Michael Frickel, 1960. エリザベート・プリュンネケ「解決を迫られる説教」ギンター・ビエナー「説教のわからぬ言葉」一九七〇年「六三ページ」。Elisabeth Plümcke, Predigen in Konfrontation, in: Günter Biemer, Die Fremdsprache der Predigt, 1970, 63.

われわれをひとつの期待が迎えてくれるということ、説教者としてのわれわれは、決して勝手気ままなことをやって趣味を楽しんでいる者ではないということに、驚きの心を抱くということから、説教作業を始めるならば、

それだけですでに多くのことを得たことになる。日曜日の労働者、と言われる。そのとおりである。だがその奉仕を待っていてもらえる日曜日の労働者である。自分の奉仕のつとめを、これが欲せられ、望まれているつとめなのだということについての驚嘆から始めるならば、このつとめはまた、感謝を伴う驚嘆の思いのうちに果たされるであらう！

さてしかし、多くのプロテスタント教徒は、説教を聞くことを怠けるストライキをすることによって、自分たちが講壇上の男からも女からも、何も期待していないことを、全く何も期待していないことを示威している。この現象がこの点で見せかけのことなのかどうか、わたしには確信がない。だが究極のところで確かなことがある。被造物が切なる思いで神の子たちの栄光が明らかにすることを待ち望んでいるということが真実であるとすれば(ローマ八・一九)、幻滅を味わっている者も満ち足りている者も、成熟している者も未熟な者も、説教者と聴衆それ自身が奇跡となることを待っているのである。それと知ることのないままに、彼らは説教が説教となることを期待しているのである。この意味では、この世のあらゆる耳は、沈黙が打ち破られて喜びになることを待っているのである。教会には入ってこない者でも、ひそかにその耳を教会の壁につけて、語ることも聞くことも奇跡であることを証示する言葉があるのかどうかうかがうのである。教会の期待ともろろの民の期待との間にある相違は、教会は自分が待っているのは誰であり、何であるのか、よく承知しており、承知しているべきだということ、他の被造物はそれを知らない、まだ知らないか、もはや知らなくなっているということではないのである。死者でさえも、自分たちをいのちへと呼び入れる言葉を待っているのではなからうか。

しかも、説教者がその方について語っているその方ご自身が、まず第一に、説教することと聞くことを待っておられるのである。神が待っていてくださるということの中心に向かって、われわれは説教の準備をする。神の期待の中へと、われわれは語りこむ。説教をする。説教を聞くのである。われわれの説教は、神ご自身によって期

待されていた語りかけなのである。

この点に、説教せざるを得ない究極の理由がある。説教が受け身のもの *Leiden-schaft* (情熱の意味を持つこの語に両意を持たせている) であるということ、ここに神の派遣の行爲が行なわれているということ、救い主の呼びかけがなされているのだということが、ここに含まれている。「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として……」(マタイ二八・一九)。「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい……」(マタイ一一・二八)。いずれの場合も、派遣においても、呼びかけにおいても、待っておられる方が語っておられる。それゆえに、われわれの説教は、二重の観点において受け身の苦しみ *Leiden-schaft* である。

結局のところやはりここで受ける苦しみは、説教者にとって自分が語りこむべき期待の地平線が、くり返し暗く見えなくなってしまう、自分がどこでもどんなに期待されているか、ということがわからなくなり、何よりも、ごく身近に自分を待っていてくださる方を見失ってしまうことなのである。われわれは、見えるところによらず信仰によって生きているのであるから、この見えないという苦しみなしに、説教において「情熱をこめて喜んでいゝ」ということはないのである。しかし、われわれが説教しているそのお方は、今来りつつある方であり、そのような方としてわれわれの説教を待っていてくださるがゆえに、喜びへの出口を開かぬ苦しみは、ここには存在しないのである。

説教者の困惑と、聴衆の不愉快さの共通分母であるのは言葉の喪失の状況であると言えよう。説教者の状況の特質は、説教者が、神についても、世界についても、教会についても、自分自身についても困惑してしまっているということにある。

第二章 困惑

以上の第一の序論的行程を理解した方は、これを建徳的な語り方だと理解したのである。この建徳的な言葉を理解した者は、今ここでそれについて語らないわけにはいかない、われわれの説教のまさしく非建徳的状況に直面しながら、それを理解したのである。この状況についての叙述を、第二の序論的行程とするのが適当だと思う。説教論というものは、何らかの忠告を与えようと試みるまえに、説教者がおちいつている途方にくれている状態を受け入れなければならない。ここで手びきが与えられうるためには、そのまえに、説教壇へのぼるべく備えている者がおちいる困惑、この説教壇への道を習い、これに慣れ、そしておそらくは疲れ果てて、諦めてさえる者がおちいる困惑が、ここに記されなければならないのである。

わたしは何にも先立つ第一のこととして、説教することはすばらしいことであり、喜びへと至るものであることを強調したのであるが、このことは、多くの説教者を喜びなき状態へひきずりこんでいる、すばらしいとは言えぬ経験に直面しつつも主張されなければならない。今ここで必要とされるであろう第二の行程は、説教することとを、今日における受苦として考えるということである。われわれが説教は奇跡であると理解するとしても、そ